

# 話速変換による英文速読指導法の研究

武 田 修 一

## はじめに

本研究では学生の英文速読能力を高める方法として、英文速読法の授業で実施している話速変換トレーニング方式の有効性を考察する。

本考察における話速変換トレーニングとは、通常ので速さで録音された音声教材を、2倍速、3倍速、4倍速と順次速さを変換して学生に聴かせ、その英文をそれぞれの倍速の音声に合わせながら目で追わせ、聴覚と視覚に刺激を与え速読能力を高める訓練をいう。

この速聴き訓練を行う前に、各行ごとに語数の累計が明示してある英文を1分間速読させ、その単語数を記録させる。次に2倍速ないし3倍速の速聴きトレーニング実施直後、同じ英文を1分間速読させ、その単語数を記録させる。前者と後者の単語数を比較させると、後者の単語数の方が平均約1.3倍に伸びるので、速読能力を高める方法として、話速変換トレーニングには即効性があることを学生は実感する。

具体的には、1回目に150語読めた学生が、話速変換訓練後に同じ英文を読むと195語読める計算となる。通常同じ英文を2回読めば、1回目より多く読めるのは当然であるが、その場合の伸び率は過去2回の調査では約1.1倍であったので、1回目150語の学生は、何の練習もせずと同じ文を再読しただけでは165語ぐらい読める程度である。

最近の脳科学の研究では、聴覚と視覚に同時刺激が与えられると、前頭葉がより高く活性化することが証明されている。学生が通常より2倍、3倍の速度に話速変換された英文を聴き、目で追っただけで速読語数を飛躍的に伸ばせるのは、この速聴きの過程で脳幹網様体が刺激され、汎化作用が生じ、脳が活性化するためである。

速聴きは各自が持つ潜在的な速読能力を引き出すきっかけを与えうる安全かつ実効性のあるトレーニング方法である。

なお1.1倍速から4.0倍速までの音声倍速教材は、後述する話速変換レコーダー「デジヴォ」により独自に作成している。

## 1 英文速読授業の経緯をたどる

本論に入る前に、私が当初より担当してきた英文速読授業の指導方法の経緯を述べ、本学における英文速読科目の受け入れ状況についても概観し、同時に話速変換トレーニング方式を導

入するに至った理由に言及する。

本学英語英文学科のカリキュラムに英文速読を取り入れたのは1988年であった。当初は必修科目であったが10年後の1998年カリキュラムの変更に伴い選択科目に変更した。理由は必修科目を削減し、学生が真に履修したい科目に幅を持たせ授業の活性化を図るためであった。科目名も5年前に英文速読から英文速読法へと変更した。

本学学生には英文速読に興味と関心を示す者が多く、必修科目から選択科目に変更後も毎年7割から8割の学生が履修している。本学が初めて英文速読を導入した当時は、日本語の速読法がブームを巻き起こし始めた時期であった。

速読の授業を始める準備期にその指導法を探る過程で、様々な人や書籍と邂逅し、速読講習会や日本語速読講座1日体験学習への参加、速読の通信教育講座、NHK文化教養講座：速読3ヶ月コースの受講などを経て学んだことが、後に英文速読授業を展開する過程で参考になった。

とりわけ能力開発研究所所長 志賀一雅工学博士とSRS研究所長 栗田昌祐医学博士との邂逅は時を得て、潜在脳力の開発や速読能力開発に関し目から鱗の知識を得た。両博士を別々に夏のゼミ合宿に特別講師として招聘した。両博士ともそれぞれの専門分野のお話を、熱意を持って分かり易くなされ、ゼミ学生に潜在能力の無限さとそれを開発する努力の大切さ、大脳生理学的に裏づけされた速読トレーニングの方法などを明快にご教示賜ったことなど感謝に堪えない思いであった。

アメリカ速読界のパイオニアといわれている、故 Evelyn Wood 著：The Evelyn Wood Seven-Day Speed Reading and Learning Program は、英文速読指導上大変参考になった。特に指を速読のペースメーカーとして使う方法はユニークで効果があり、今でも学生に速読能力を高める手軽な手段として薦めている。

同著の中で Evelyn Wood が手の動きが速読に役立つ方法を偶然に発見するエピソードが次のように述べられていて興味深い。

「Evelyn discovered the hand-motion concept as she was brushing dirt off a book that she had tossed down on the ground. In cleaning off each page, she began to read simultaneously at supersonic speeds—and thus the Wood hand-motion concept was born.」

そして、手の動きが持つ3つの機能を次のように述べている。

- ・ They help establish the fastest possible pace or rhythm for eye movement during the study of written material.
- ・ They enhance concentration. Remember, if you're not paying attention to the words when you use this technique, you'll just be wiggling your hand on the page—and few people will allow themselves to do that for very long.
- ・ They prevent regression, or going back over material you've already read.

Over the years, this technique has been refined so that now there are many possible hand

movements for very step of studying and reading. Also, when a student becomes adept at using several of the standard motions, he may want to experiment with his own personal variations. A number of our students have even formulated completely new techniques that are more appropriate to special tastes or needs.

学生たちもまさにそれぞれ独特の手法で Wood hand-motion を活用しているのは興味深い。

本学の学生に適した英文速読用の教材探しには、前年度受講生のアンケートを参考にして年度ごとによりよいテキストを求めていたが、文京の学生に適したメインになる英文速読教材の作成が必至と判断し、本学英語担当教員 3 名の共著で「Speed Reading in Action」を1993年に発行した。このテキストで Evelyn Wood のエピソードを紹介したり速読に役立つアイデアを盛り込んだ。5年後の1998年には、共著者のひとりである native に頼み、前著よりやや速読し易くなるように、学生が興味を持てるトピックスを平易な英文で書き下ろしてもらい、姉妹編「Speed Reading Adventures -Basic-」を発行した。

英文速読に興味をつなげ授業以外の空き時間を最大限利用できるように、テキスト以外にも、読み易い英文教材をプリントで毎時間提供し、同時に副読本として学生が興味を抱く内容で読み易い洋書も機会あるごとに紹介した。

当時英文速読の授業で実践した技法は様々で、英文を速読する時に大切な、リズムとスピードを重んじて、平易な英文を時間制限の中で多く読ませるため必ずストップウォッチで時間を正確に計り1分間、2分間、3分間とメリハリを付けながらそのつど速読語数を記入させ、前回との伸び率を対比させて向上意欲を高める動機付けを図った。前述した Evelyn Wood が推奨する指をペースメーカーとして使う方法も活用した。また日本語の速読能力を向上させる手段としてよく使われる眼筋を鍛える様々な方法も取り入れたり、トレーニングが単調にならぬように、速読体操を行ったり、栗田博士が開発し、世界伝承医学大会でグランプリを受賞した指回し運動も気分転換と潜在能力開発の一助として積極的に取り入れた。また速読訓練を始める際には集中力を高める必要があるので、腹式呼吸で学生をリラックスさせ、気持ちよく自分の能力を発揮できるクラスの雰囲気作りの一助にした。

腹式呼吸を教室で学生に勧める際に、渋谷にある西野塾に3ヶ月通い西野流呼吸法の基礎を学んだことが役立った。学生も腹式呼吸に関心が高いことも分かった。「誰もが持っている〈気〉を、呼吸法によって充足させ、身体に自由に巡らせることが出来るようになると、身体は見違えるほど強靱になり、引き締まってくる。しかも身体から湧きおこるパワーは潜在能力を十二分に引き出してくれる」という受け売りの説明にも学生は素直に耳を傾けてくれた。

英文速読能力をさらに高めるゼミの授業では、英文速読能力を高めるために教室で行っている補助技法が実際に脳にどんな影響を与えるかを科学的に計る目的で、日本で初めてビデオキャプションアダプターを開発したヒューテックエレクトロニクス株式会社のご厚意をいただき、脳波測定器一式をご持参で、専門家が来学下さりゼミ生全員の脳波を測定してくれた。 $\alpha$ 波、 $\beta$ 波、 $\theta$ 波の出没が色別縦線グラフに鮮やかに刻々と明示され、それを見ながら学生たちが少

しでも  $\alpha$  波を多く出そうとリラックスする努力をしていた姿は新鮮であった。 $\alpha$  波の計測結果を見て学生は一喜一憂したが、5月時の測定結果よりも10月時の測定結果にかなりの上昇が見られた時には、日頃の訓練が報われたと全員が喜んだ。

このように様々な補助技法を、その時々々のクラス状況を見て有効に活用し授業を展開した。こうした過程の中、嬉しいことには英文速読に熱心に取り組む学生が増え始め、卒業後もひたむきに速読訓練を続け、一念1万ページの英文を読破して確かな英語力を身につけ、35倍の競争率を突破しT女子大に編入し同大の大学院を優秀な成績で卒業した者や、その先輩に触発され本学在学中に1万2,000ページの英文を読破して英語運用能力を養い、2年次には英検準1級に合格、R大学に編入し同大学の教授より英語力を高く評価された学生など、自分の潜在能力を十分に引き出し学業成績も向上する学生が輩出した。

いずれも英文速読の授業を受けてその技法を生かし英文の多読を実践した努力の賜である。

後者が本年2月本学在校生に贈った速読・多読をすすめる文には、英文速読授業を展開する面で参考になる部分が含まれているので、本人の許可を得て、その一部をあえて原文のまま引用する。

「これからお話する英語原書1万ページ読破は私に特に大きな力をくれました。私はもともと編入希望だったのですが、文京のパンフレットを見てもわかるとおり、先輩方が有名な大学に編入しているのを見て、私にも頑張れば出来るのではないかと、ひそかに希望を抱いていました。当時、東京女子大学に編入し、大学院に通っていた先輩の話聞いて、さらに希望は膨らんでいきました。

その先輩は英語の原書を1万ページ読破したというのです。私は、「何てすごいだろう！」と驚嘆し、大きな目標を突破した、その意気込みに純粋に憧れました。次第に私も、1万ページ読んでみたいと思うようになりました。ただ、高校生のときに、当時アメリカ映画で、キアヌリーブスが出ている、「雲の上で散歩」A WALK IN THE CLOUD の原書を書店で見つけて、トライしてみたものの、とても難しく挫折してしまっただけだったので、私に出来るだろうかという不安もありました。でも、よく先輩の話を知ると、最初は絵本など簡単なものから始めたとのことで、「よし、これなら私にも少なくともスタートできる！」と思い、1万ページ読破への長い道のりが始まりました。とは言っても、私は学費を自分で払わなければならない、アルバイトもしていたのでハードなスケジュールでした。でも、1万ページ読めたら私はきっと変わる、新しい道が開けるはず！と信念を持ち、頑張りました。大切にしたのは、通学時間、片道1時間20分かかったので、この時間を活かせばきっと力になると思い、往復約3時間、バイトのない日、2限が空いているときなどを生かしました。私はディズニーが大好きだったので、最初は白雪姫とかシンデレラ、ピーターパンなどを読みました。もともと、読書好きだったので苦にはなりません。慣れてくると憧れのハリーポッターについて挑戦しました。正直つらい時期もありました。ですが、自分の編入の夢を信じ、具体的に自分が編入試験に受かって、大好きな英米文学、特にイギリス詩をもっと詳しく楽しく勉強している自分

をイメージしました。

1万ページという大きい、遠いなあと思うかもしれませんが、私は100ページをひとつの区切りだと思い、100ページずつ、少しずつを大切に読んでいきました。

5000ページぐらい読んだころから、自分の脳に今までとは違う、なんというか英語を吸収できる、別の消化器官ができたように思いました。そして、どんどん読むのが楽しく、スピードも上がったと思います。そして、1万ページついに読み終わりました。

これは本当の話ですが、英検準1級、特に受験対策をした覚えはまるでないにもかかわらず、見事合格できました。そして第一志望であった立教大学の文学部英米文学科に合格しました。

文京生のみなさん、努力しただけの成果はかならずです！ みなさんが描いてきた夢をあきらめないでください。きっと、未来の新しい自分に出会えるはずです。挫折しそうになってつまずいたら、また起き上がればいいのです。失敗は成功の元といいます。いろいろな夢を大きく大きく描き続けてください。」

## 2 英文速読指導法の転換期

本学のカリキュラムに速読を取り入れて以来早17年が経過したが、その間、速読能力向上のために年々創意工夫を凝らしながら、よりよい訓練方式を探り、様々な方式によるトレーニングを実施してきた。上述したのはその中の一部であるが、今までの速読訓練の過程の中で、毎年ほんの数人に過ぎないが潜在能力が十二分に発揮された学生が目を見張るような進歩を遂げる場合がある。既述の洋書1万ページを読破した2人の学生もその部類に入る。

Evelyn Wood の同著書の中にも次のような実例が載っているので引用する。

「Consider what happened to Richard, a high school senior who took one of our three-week Evelyn Wood reading courses.

He had been progressing quite well and had increased his reading speed from just under 300 words per minute to just 1,000, according to the most recent test he had been given.

Many of our students end up reading faster than this, however, and Richard's fast-developing skills suggested that he might increase his speed significantly if he kept practicing. His instructor expected him to be pushing 1,200 to 1,500 words per minute before he completed his work.

Toward the end of the course, however, something odd happened. Along with the other students, Richard was assigned several short books to read in class, the last of which graphically detailed the nuclear bombing and devastation of Hiroshima at the end of World War II. The instructor later recalled that she had been timing the class for only a few minutes as they read the Hiroshima book when Richard turned his volume over and walked out of the room.

“My husband was waiting out in the hallway for the class to finish, and when he saw

Richard come out, he thought the boy was sick,” she said. Apparently, the young man had turned quite pale and seemed extremely nauseated.

At the next break, the instructor, who had been apprised of the situation by her husband, approached Richard and asked, “Are you all right?”

“Yes,” he replied, “but something strange happened to me in there.”

“What was that?”

“As I was reading, the words seemed to come off the page and become a motion picture I was — literally *saw* — the bombing and what happened to those Japanese people ! And I got sick.”

“You finished the entire thing?” the instructor asked, knowing that the book was more than a hundred pages long.

When the boy nodded, the teacher went over and checked the time he had spent reading the book. After a quick calculation, she discovered that Richard had been reading at more than 3,000 words per minute. Furthermore, a quiz on the book showed that he was reading with more than 90 percent comprehension.

Think for a moment about the implications of this experience: If the average student reads at 250 words per minute, it will take him nearly seven hours to read a two-hundred-page book (assuming that there are five hundred words to the page). But if that same student begins soaring along at the rate of 3,000 words per minute, he or she will be able to complete the same book in less than thirty-five minutes.]

このエピソードを大変興味を持って読んだ。潜在能力開発に示唆を与える実話である。教室における速読指導を続ける中で、このように劇的に学生の潜在能力を引き出すきっかけを与える方法はないものかという考えが、このエピソードを読んで以来頭を離れることがなかった。

しかしながら、英文速読を17年間教えてきた経験の中で、これほどまでではなくとも訓練の過程で、ある日突然速読語数が上昇し、その後も同じレベルを保つ学生が毎年数名はいる。

過去の例では、第1回目の授業で1分間に185語速読できた学生が、2週目は181語、3週目に218語、そして4週目には一気に330語を速読している。それ以降は251語から279語の範囲で高水準を保っていた。読んだ文の comprehension questions も6割から8割の出来でまずまずであった。

### 3 話速変換トレーニングの導入

速読トレーニングは優れた技法であっても、同じトレーニングを繰り返すだけでは学生の士気が上がらず退屈な訓練に陥ってしまう。したがってメインになるトレーニングを軸に持ちながらも、常に工夫を凝らさなければ授業の活性化は図れず、スピードとリズムを大切にする速読の授業でもその展開に工夫がなければ睡魔に襲われる学生がいる現状を打開できない。

以前から社会人対象に発行されかなり注目され、読者の多い田中孝顕著による聴覚刺激に関する書籍や、七田眞著による右能開発関係の書に興味を感じていた。読んでみると共通しているところがある。それは視聴覚への刺激が脳を活性化させ、潜在能力を開発する有力な手段となると説いてあるところである。

両氏の著書の中から授業で使える部分をアレンジして使わせていただき、視聴覚を刺激する速聴きの訓練を、日本語でも英語でも行ったところ目に見えて効果が現れた。

問題は聴覚に刺激を与えるためには、通常ので速さで録音された音声教材を、2倍速、3倍速、4倍速と話速を変換しなければならないことであった。

おりしも、話速を変換する機器「話速変換レコーダー：デジヴォ」がヒューテックエレクトロニクス株式会社によって開発されていて、試作品を試聴する機会に恵まれたのは幸いであった。視聴覚教材として使用する側の立場から若干の希望を出したところ聞き入れていただき感謝している。完成品は大変なすぐれものになっていた。

作成を進めていた速読用テキスト「Rapid Reading with TOEIC Test Vocabulary」も2003年1月発行の運びとなり、通常ので速さで録音済みの教材も「デジヴォ」により、2倍速、3倍速、4倍速に変換してもクリアな音質を保つ倍速音声教材を作成することができ、いよいよ話速変換トレーニングを始める準備が整った。

#### 4 話速変換トレーニングの導入

最新の脳科学の研究により聴覚と視覚の同時刺激が前頭葉の活性化に有効であることが証明されている。

諏訪東京理科大学篠原助教授（専門：脳システム論）により、話速変換により速聴きを行うことで前頭葉の活動が活発になるかの実験が行われている。

以下にその実験結果の一部を引用させていただく。本稿では1.1倍速から4.0倍速の範囲で話速変換した音声教材を聴くことに「速聴き」という表現を使っているが、篠原助教授の研究資料を引用させていただく際には、同氏の採用している「速聴」という表現をそのまま使わせていただく。

「近赤外線によって脳活動を測定する光トポグラフィ装置を使って「速聴」経験者と「速聴」未経験者について、「速聴」時の前頭葉活動をそれぞれ調べた。そして普通ので速で聴いている時に比べ、「速聴」によってどの程度賦活するのかを比較した。

その後、未経験者が「速聴」トレーニングを約1ヶ月間継続して行った後の前頭葉活動の変化も調べた。また、高齢の「速聴」経験者に「前頭葉機能」テストを実施し、同年齢の未経験者の成績と比較した

以下、結果とともに「速聴」の有効性について紹介する。

・「速聴」経験者は前頭葉が賦活しやすい：「速聴」経験者は、1倍速→2.5倍速と速度を上げることで前頭葉活動が高まっていることが、2.5倍速の前頭葉トポグラフィ（通常速比）に表

示されている。

・「速聴」経験者は、速度が速い方が賦活する：「速聴」経験者は、聴き取れる最大速度で前頭葉の活動が高まっていることが、速度を上げた場合の「速聴」経験者のトポグラフィに表示されていることから、「速聴」経験者は速い聴覚刺激に対して、全体的なイメージをとらえつつ、きめ細かな処理を行っているものと考えられる。

継続が脳力アップのコツ：「速聴」を行ったことのない未経験者に継続して「速聴」トレーニングをしてもらった。未経験者が「速聴」を約1ヶ月間、1日15分程度行うことで、前頭葉活動に変化が見られた。

当初、未経験者では、2.5倍速時、前頭葉の賦活は見られなかった。しかし、トレーニング後、2.5倍速時の前頭葉右下の賦活が有意に高まり、左前部も賦活傾向にあった。

2.5倍速時には低下した右上（注意に関わる）のふ活も、最大速時には有意に高いという結果が出た。最大速時は、右上だけでなく、2.5倍速時に比べて、全体的にも賦活していた。

これらの結果から、「速聴」を継続的に行うことで、脳の中に速い聴覚刺激に反応しやすいネットワークが形成されると考えられる。

篠原菊紀氏による上記一連の実験結果は、話速変換により英文速読指導を行う上で極めて貴重な資料になり、同時に今後、現行の速読指導に勇気を与え更なる創意工夫の必要性を痛感させるものである。

話速変換による速聴きの有効性に関する研究は米国では1960年代から盛んに行われている。特に David B. Orr による速聴き研究は熱心で先見の明があった。当時は速聴き（米国などでは time-compressed speech, expanded speech, speed listening 等の語句が「速聴き」を表現する語として使われている）に関する研究は揺籃期であり、Orr はこの分野における研究の開花を次のように予告し、速さを正確にコントロールできる機種 of 早期開発を渴望していた。

「And still it seems that almost no one has ever heard of time-compressed (or expanded) speech. But I return to my earlier contention that this is about to change.

Certainly one of the foremost restraints upon the growth of the field of rate-controlled recording in general, and time-compressed speech in particular, has been the fact that speech compression equipment has been both scarce and expensive. At the present time, there is only one very small manufacturer who can supply equipment of the electromechanical sampling type, and that at a cost of several thousands of dollars or more. The German machine is no longer being produced, and was even more expensive; and other devices are one-of-a-kind, laboratory developments. Thus research, and more particularly applications, has been restricted to institutions which could afford and obtain the required equipment.

The situation has been eased somewhat by the fact that the Center for Rate-Controlled



Recordings at the University of Louisville has offered a service in preparing limited amounts of compressed tape for research purposes, at cost. But the fact of the matter is that few if any individuals have had the opportunity to work with compressed speech outside of the meager number of institutions possessing the equipment.

However, in the very near future, perhaps even by the time this book is distributed, concrete steps will be under development to bring to the public market a speech compressor with state-of-the-art quality at a price that individuals can afford, perhaps \$300 to \$500. This machine already exists, though it has not yet gone into production. And in the not too distant future, developments now well advanced in several laboratories promise an even less expensive model. The importance of these developments can scarcely be overemphasized. One division director of a government's agency has written to me (personal communication) that he regards the development of an inexpensive home speech compressor as "the breakthrough we have been waiting for."

Thus, it is my promised prediction that, once these inexpensive home compressors are available (which should be within a year or two), it will seem that everybody has heard of time-compressed speech, and that every school and most people will eventually have one.]

Orr が“TIME-COMPRESSED SPEECH” Vol. I の GENERAL INTRODUCTION で予言したとおり、日本でも最先端技術の粋を集めた「DiGivo」が開発されいみじくも、Orr が予言した範囲の、比較的良心的な価格で入手できるようになり、話速変換した教材作りに重宝している。

話速変換トレーニングに適した速読用テキストを作成する上で注意を払ったことを以下に挙げる。

(1) 速読に向けたテキスト作成に当って留意したこと：

- ・読みやすい英文であること
- ・内容的にも短大生・学部生に適していること
- ・速読教材であるので各行ごとに語数が累計で明示されていること
- ・本文を速読した直後に、内容もチェックできる設問があること
- ・単語力を増強する工夫があること
- ・話速変換トレーニングの継続は単調になり易いのでテキストの各章における設問には変化を持たせること
- ・テキストの各章に速読語数の目安になるように30秒ごとの語数を明示すること
- ・巻末に各週ごとの速読語数を記入できる折れ線グラフ作成欄を設けて成績の変化が一目で分かるようにすること

- ・巻末に1秒～59秒までの秒→分換表をつけ、秒刻みに速読語数の算出ができるようにすること
- ・本文の語数は、各章とも350語前後に統一すること、理由は速読訓練を受けていない英語を母国語とする native speaker が1分間に読む平均的なスピードが250～300語といわれているので、ややチャレンジ精神を發揮してもらった語数に設定した。

以上10項目について共著者及び出版社編集責任者と十分検討し作成した。テキスト1章から15章までのトピックスについては、本学短大1年生約100名のアンケート調査によって絞り込み、そのトピックスに基づき本学教授 Dr. McConnell が名文で書き下ろした。

お陰さまで外部からの評価もよく、速読用テキストとして広く採用されている。

## (2) 「デジヴォ」による話速変換教材の作成について

「デジヴォ」には色々な機能があり利用方法も様々だが、話速変換機能を使う一番簡単な方法について触れてみたい。

上述のテキストにはCDによる聴覚教材が、学生用教員用ともに完備している。教室で使う方法としては、まずテキストの音声教材を「デジヴォ」付属のスマートメディアに録音する。後は好みのスピードにダイヤルを回し、調整するだけである。スマートメディアに録音された音質は劣化することなくいつまでもクリアである。授業では主に2倍速、3倍速を中心に使って速聴きによる効果を上げて速読指導に役立てている。ナチュラルスピードで20分かかる教材や平易な英文物語を、最初はナチュラルスピードでスタートし、徐々にスピードを上げ最終的には3倍速で終わる方法は、抵抗なく徐々に速さに慣れていくことができるので学生には評判が良いトレーニングである。

## 5 話速変換トレーニング方式による英文速読指導の有効性

話速変換トレーニング方式による英文速読指導の有効性、学生の反応等について考察してみたい。

以下に示す各種統計は、本学短大1年生（2004年度生）英文速読法受講生54名が提出した速読記録報告書に基づいて作成したものである。

使用した速読用教科書の程度と内容を示すため、第1章の pre-reading としての単語紹介と本文の内、第2パラグラフまでと、その範囲内で答えられる本文速読直後に課する Comprehension Questions T/F を5問中2問までを次に示す。

### 第1章 Falling in Love

(上記タイトルの下に、西洋人の男女が見晴らしの良いバルコニーで、お茶を飲みながら楽しく語り合う写真を掲載、その下に“Falling in love is a special experience.”の英文あり)

- Key Words
1. **share**: to use or enjoy something in common
  2. **assure**: to guarantee; to promise
  3. **irritate**: to make someone angry; to anger
  4. **demand**: to ask for something boldly, as if one has a right to do so

People— young and not-so-young — often think about love. They want to meet that special someone who will make them fall in love. But they also worry about love. How will they know if they have fallen in love? What will they feel? What should they do? Perhaps you too have asked yourself these questions. (54 words)

I cannot give you the answers, but I can **share** with you the advice that my grandmother gave me. Whenever I asked her about love, she always told me to stop worrying. She **assured** me that I would know when I fell in love. Her advice **irritated** me, because it was so vague. I **demanded** in an angry voice, “HOW will I know? My grandmother replied calmly,” You’ll know. But I didn’t believe her. (128 words)

#### Comprehension Questions T/F

- ① People— young, and not-so-young — often think about love, but they don’t worry about it.
- ② Whenever I asked my grandmother about love, she always told me to stop worrying.

授業の進め方：

1. 各章のタイトルを読ませる。
2. タイトルの下に載せてある写真を見させる。
3. 写真の下にある英文を読ませる。
4. Key Words の英語説明に目を通させ、意味を理解させる。
5. Key Words の音声教材を聴かせリピートさせる。
6. 上記 1. ~5. の過程で各章の内容を大胆に予想させる。
7. 本文の音声教材を 1 回ナチュラルスピードで聴かせる。
8. 制限時間 3 分以内で本文を速読させる。

(スクリーンにストップウォッチを拡大して映し出してあるので、各自読了時の時間を正確に計れる。)

9. 3 分経過後直ちに Comprehension Questions を課し、答え合わせを行う。

次に教科書にある各種練習問題に挑戦させ答え合わせを行い、Coffee Break コーナーではリラックスさせながら比較文化の情報提供、眼筋運動、各種速読体操等を実施する。

以上の課題が終了した時点で、いよいよ話速変換による速読トレーニングが開始される。こ

の時点で80分授業のうち、副教材の速読訓練も入るので、約60分が経過している。

\* 話速変換による速読トレーニング

1. 本文に戻り1分間速読させ、読めた語数を記録させる。
2. 本文の全文を2倍速で聴かせ、英文を目で追わせる。
3. 再び本文を1分間速読させ、読めた語数を記録させる。
4. 本文の全文を3倍速で聴かせ、英文を目で追わせる。
5. 再び本文を1分間速読させ、読めた語数を記録させる。
6. 時間があれば4倍速に挑戦させる。
7. 当日の速読トレーニングについて気づいたことなどを comments 欄に記入させる。

大体以上の要領で昨年1年間授業を展開した結果の数値は以下の通りである。

章	速読語数 (54名平均)	Comprehension (54名平均)
1.	162	3.2点 (5点満点, 以下同じ)
2.	194	4.0点
3.	185	3.9点
4.	189	3.5点
5.	166	3.4点 1章~5章までの平均: 179 words 3.6点
6.	180	3.5点
7.	171	3.6点
8.	213	3.8点
9.	181	3.9点
10.	192	3.9点 6章~10章までの平均: 187 words 3.74点
11.	209	3.5点
12.	194	3.7点
13.	203	3.9点
14.	195	3.8点
15.	215	3.7点 11章~15章までの平均: 203 words 3.72点

上記速読語数の各章ごとの平均は、話速変換トレーニングを実施する前の語数である。したがって話速変換トレーニングの効果が現れるのは次週の平均値においてである。

なお、既述した通りテキストをいきなり速読させるのではなく、pre-readingの段階で速読し易い作業を行っているので、上記の速読語数の平均値はそれを踏まえて見る必要がある。

上記1年間の統計的数値から推測できることは以下の通りである。

1. 1章(162語)から2章(194語)への急上昇は話速変換トレーニングの効果が、学生の

精神面（英文の速読はトレーニング次第で自分にもできそうだ）に現れた結果である。

2. 各章の本文の難易度に多少のばらつきがあり、また学生が強く興味や関心を示す度合いにも個人差があるので、毎時間着実に速読能力の向上が数値の上で見られるわけではないが、全15章を5章ごとに見てみると、以下の通り堅実に速読語数が上昇しているのが分かる。

1章～5章 平均 175語

6章～10章 平均 187語

11章～15章 平均 203語

3. 各章に設けた速読後に課している、内容をどの程度理解できたかをチェックする設問の正解率には際立った上昇は見られないが、正答率64%から80%の範囲で保てているのはまずまずと評価できる。
4. 話速変換トレーニングは毎時間同じ方式で実施するわけではなく、2倍速、3倍速、4倍速と3段階で実施できる場合と、2倍速だけで終了する場合があります、統計的にはその効果を数値の上で出しにくいですが、2倍速、3倍速の話速変換トレーニング後の伸び率は平均1.3倍である。（4倍速の速聴きには大半の学生が困難を感じている。）

これを上記〈2.〉の平均速読語数に当てはめると次の数値になる。

1章～5章 平均 175語 ⇒ [228語]（話速変換トレーニング後）

6章～10章 平均 187語 ⇒ [246語]（話速変換トレーニング後）

11章～15章 平均 203語 ⇒ [264語]（話速変換トレーニング後）

学生は毎時間話速変換トレーニング後に、各自が平均1.3倍前後の伸び率で速読語数を確認できるので次回のトレーニングに期待を持てるようになる。

話速変換トレーニングには汎用性があるのも大きな利点である。例えば別の英文を話速変換の3倍速で聴かせ、その英文を追視させた後で、当日やるべき章の本文を速読させた時の学生の感想に、話速変換トレーニングには汎用性があることが実感として語られているので、3倍速トレーニング後の語数と共に例示する。

「9章でない文を3倍速で聞いた後の速読だったが、以外に効果が現れた。耳が速いものに慣れてくると、頭の中での速読も速視もできるようになるのだと思った。」

……221語 ⇒ 255語 (A.E)

「chapter 1を3倍速で聞いて、目で追っていくと、分かりやすく、聞き取れました。」

……175語 ⇒ 235語 (Y.T)

「違う章を3倍速で聞いたのに、かなり単語数があがったのでびっくりした。あと、今まで3倍速になると、ついていくのがせいっぱいだったけれど、今日は余裕があって効果が出ているのかなと思いました。」

……175語 ⇒ 254語 (A.N)

「chapter 1 を 3 倍速で聞いて、目で追っていくと、分かりやすくて、聞き取れました。  
日々の努力があってこそだと思う。」

……175語 ⇒ 235語 (H.E)

話速変換トレーニングはこのように即効性がある反面、訓練を日々継続しなければ一過性の効果を上げるに止まる恐れが十分にある。そのため教科書の音声教材を全章2倍速、3倍速、4倍速に話速変換した独自の倍速音声教材を「デジヴォ」で作成しMDに録音して希望者に提供した(実費:MD代100円)。約5割の学生が購入した。購入者の利用度について追跡調査をしていないが、週1回の授業で思い出しては聞く程度の学生が大半であることが推察できる。毎日聴いている学生は自ら報告してくれるがほんの数名に過ぎない。学生に求める自学習の推進を図る難しさを痛感する。今後話速変換方式のトレーニングを推進する上からも、自学・自習を促進する工夫が必要である。

今年度英文速読法受講生1年生45名に、正味6ヶ月の授業経過後に Erskine Coldwell の作品 The Visitor (2,773 words) を制限時間を20分に設定し授業中に速読させた。

結果は以下の通りであった。

1. 20分以内で読了した学生数……21名 (45%)
2. 前期までの目標としていた1分間で150語以上読めた学生数……14名 (30%)
3. 最速は7分56秒で読了した(1分間に350 words) ……1名 (2%)
4. 1分間で200語以上読めた学生数……4名 (9%)

初めて接する英文であっても、比較的平易な文章なので、1分間に150語以上読破できる学生が少なくとも50%以上出ることを期待していただけない、反省すべき課題が残った。

しかしながら普通の授業では3,000語近い文章を読ませる機会を与えなかったことを考えればそれなりの結果とも思える。常に1分刻みの単位で速読のトレーニングに慣れている短距離型の学生に、いきなり中距離を走らせたことによる息切れは、無理からぬことであった。今後の速読トレーニングに、やや長めの英文を読ませる方式も取り入れたい。

以下に示す良い結果を出した学生のコメントは示唆に富んでいて参考になった。

「とっても楽しかったです。すごく集中して読めました!!」……7分56秒で読了した学生

「意味もとれながら速読できたことに実感を覚えました。要領をようやくつかめてきたみたいです。とても嬉しいです。」……10分2秒で読了した学生

「物語はとてもおもしろかったです。男女の微妙な気持ちのゆれが少しですがわかることができました。」……16分40秒で読了した学生

選択科目といえども話速変換方式による英文速読法の授業が常に歓迎されているわけではなく、出席調査用に学生に毎時間書かせているコメント欄には、辛らつな批判を始め、睡魔と戦う愚痴、示唆に富んだアドバイス、速読のコツがつかめ語数が一気に伸びた喜びなど様々な意見が寄せられ、それらを読むにつけ、トレーニング方法に変化を求める学生の声が身にしみる。

トレーニングのマンネリ化防止こそ最優先課題である。

短大において話速変換トレーニングによる速読指導を行っているところは現時点では希少であると思われる。欧米では40年以上にもわたって研究が続けられ話速変換による速聴きの効用が教育界のみならず、医学界、能力開発部門等で広く認められ応用されている。本学における研究も始まったばかりであるが、既述の通り優秀な話速変換器「DiGiVo」がすでに開発されているので、今後大いに速読用教具として活用しながら、英文を積極的に読む習慣を学生につけさせる起爆剤にしたいと願っている。

幸いなことに話速変換方式によって初めて体験する2倍速、3倍速、4倍速の世界は、日本語でも、英語でも、音楽においても、多くの体験者から一種の驚きをもって歓迎されている。一例を挙げれば、ここ数年続いている高大連携の中で、埼玉県内にある高校では多くの生徒が強い関心を持って話速変換による高速学習を歓迎してくれている。

問題はこうした衝撃を受けるような初期の関心と期待をどのようにして持続させ、速聴きによる高速学習が学生の満足度をいかに高め続けることが出来るかである。

そのためには毎時間の授業の展開方法そのものにも変化を持たせ、その日の学習結果や成果を必ず次回の授業で評価し、進歩の喜びや自学・自習の大切さをクラス全体で共感し合える工夫が必要と痛感している。そして記録させることの大切さとそれを必ず確認してまめに評価を与える必要がある。本年度は課題を与えず毎時間の評価に時間をとれなかったことが悔まれる。

今までのパイオニアとしての体験を活かし、本学における話速変換方式による英文速読指導の研究を重ね高速学習の基盤を揺るぎなきものとする責任を感じている。

## 6 おわりに

話速変換による速聴きトレーニングが単なる速読のための手段に過ぎないのであれば教育上あまり意味がない。各種能力開発の分野においても十分に応用できる可能性を秘めているので、今後の授業展開の中で十分この点にも留意し指導に当たりたい。

「DiGiVo」が持つ多機能のうち使っているのは、現時点ではほんの一部に過ぎないが、フルに活用すれば、手間隙はかかるが良質でユニークな音声教材の作成も可能である。

当面は英文速読法の授業で高速学習のすばらしさを学生に実感してもらおう教具として活用し、学生に英文をどんどん読む楽しさを与えたい。何事を達成するにも、明確な計画と目標が必要で、またその過程を記録することも大切である。記録することは、トレーニング時間、読んだ英文のページ数や語数、確実に覚えた単語や熟語の貯金記録、などが考えられる。

英語の実力は、やさしいものを大量にしかも高速でインプットすることによってついてくる。この方法で確かな英語力をつけた学生が後輩にメッセージを残している。

以下に紹介する。(原文のまま)

1年間で36万8,721語を読んだ「Y.I」

「英語の本を読み始めて、世の中には、日本語訳された本や、日本の作家の本よりもずっとハラハラする本があるのだと思い知らされた。今まで英語で書かれた本を読んでこなかったことが、とてももったいないと思った。これからも英語を読んでいきたい。もっと早く始めていれば、100万語達成できたかと思うとくやしい。まだまだ大学でやりたいことがあるし、新たにやりたいこともできてしまったが卒業してしまうので成し遂げることができない。後輩にはくいのないようがんばってほしい。」

1年間で13万2,807語を読んだ「A.S」

「単語を、いままではひとつずつ追って読んでいたが、かたまり(チャンク)として文を読めるようになってきた。本は、初めから難しいものを読むよりも、やさしい本から始める方がいいと思う。また、何冊か本を読んでいくと分からない単語でもなんとなく意味がつかめるようになってきました。」

1年間で10万3,500語を読んだ「Y.W」

「速読を実践できてとても良かったと思う。まだ速読が十分なレベルではないけれど、少しずつスピードが上がっていることで自信を持つことができた。以前は文法を気にしながら読んでいたのが、前から読めるようになった時は本当に嬉しかった。それを実感したのは、つい先日だ。23日に英検の試験を受けたが一昨年の10月に受けた時より、長文問題がはやく解けるようになったのだ。また、速読という面だけでなく、本を読むことは私に新しい発見と感動を与えてくれた。特に、今はマスターオブザゲームに夢中になっている。読んでみると、映画の場面がよみがえってくるのだ。初めは、チェイスよりおもしろい作品ではないだろうと思っていたが、今はハマッてしまっている。マスターオブザゲームは、またぜひ読み返したいと思う。また、卒業しても本を片手に通勤して速読を続けていきたいと思う。1年間、本当にどうもありがとうございました。速読バンザイ!!」

この喜びと感動を多くの学生と共有したい。この学生たちは実に本学の図書館を利用したライブラリーゴウアーであった。洋書の情報交換も盛んに行い洋書講読の喜びを共有しつつ切磋琢磨している姿は凛として輝いていた。

本学の図書館が、2,000冊以上の easy reading 用の洋書を特別なコーナーを設け学生の便を図ってくれている。大いに利用させていただく方法を18年度の英文速読法の授業計画に盛り込む計画をすでに立てている。

英文速読の指導を通して、洋書100万語読破のキャンペーンを全学的に広げ、新生英語科の特色としたいと祈念している。

#### 参考文献

Duker, Sam. 1974. TIME-COMPRESSED SPEECH. Volumes 1, 2, 3

The Scarecrow Press, Inc. Metuchen, N.J.

Buzan, Tony. 1991. SPEED READING. A Plume Book.



Wood, Evelyn. 1985. THE EVELYN WOOD SEVEN-DAYS SPEED READING AND LEARNING PROGRAM.

篠原菊紀著「脳がみるみる若返る 速聴ドリル」きこ書房。

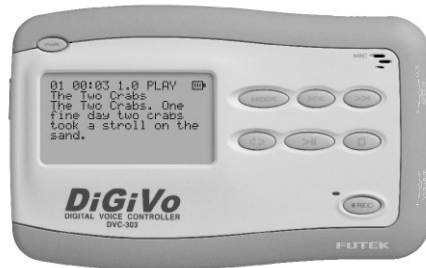
七田眞著「超右脳 英語法」KK ロングセラー。

田中孝彰著「聴覚刺激で頭の回転が驚くほど速くなる」きこ書房。

Gary Cantor・高取清・武田修一共著「Speed Reading in Action」桐原書店。

Gary Cantor・高取清・武田修一共著「Speed Reading Adventures—Basic—」桐原ユニ。

Joan McConnell・武田修一共著「Rapid Reading with TOEIC® Vocabulary」成美堂。



#### DiGiVo の主な機能・特徴

1. 速く聴く (1.1~4.0倍)

DiGiVo で速聴きすることにより、外国語のスピードに早く慣れることが出来る。

速読訓練に役立ち集中力もつく。再生スピードを変えても音程は変わらない。

2. 遅く聴く (0.3~0.9倍)

DiGiVo でゆっくり再生すれば、速すぎる音声教材の内容も理解し易くなる。

3. リアルタイムで遅く聴く (0.3~0.9倍)

英語ニュースなどを DiGiVo に録音しながら、自分の聴き取りやすいスピードに設定して聴くことが出来る。

いったん録音した英語ニュースは、0.3倍から4.0倍の範囲内で、遅聴きも速聴きも出来るので、リスニング能力の向上に役立つ。

4. 話速にあわせて文字表示

DiGiVo Editor (別売り) を使って、画面に、英文文字を話速にあわせて表示出来る。

速読訓練に大いに役立つ。

5. 録音が簡単に出来る

TV, CD, MD, PC など出力端子のあるものなら何でも簡単に録音出来る。

マイクが内蔵してあるので、会議、講演、取材のインタビュー録音に便利。